

2017年12月3日

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」 ヨハネ 11:25

ラザロの墓の所で、主イエスを迎えたマルタは、行動的なだけでなく（→ルカ 10 章）、信仰的な女性で、主が愛と力に満ちた救い主である、と信じています。

「ラザロは墓に葬られて既に 4 日もたって」いて、エルサレムからも「多くのユダヤ人が…慰めに来て」いました。マルタは、「イエスが来られたと聞いて」迎えに行きますが、彼女は他の誰よりも主を待っていたのです（待降節！）。

彼女の願いは、主が早く来てラザロを癒してくださって、「わたしの兄弟は死ななかつた」となることでした。しかし今も彼女は、主が「神にお願いになることは何でも神はかなえてくださる」と固く信じています（→シンプソン「賜物より癒しより与え主ぞ…」新聖歌 346 番）。

主は、「あなたの兄弟は復活する」と特別な約束をされますが、彼女は「終りの日の復活」のことしか考えません。改めて、「わたしは①復活…②命…①死んでも生き…②決して死ぬことはない…信じるか」と言われると、「はい…信じております」と答えます。十分に理解できなくても、主がおられるだけで満足です（→キリスト抜きクリスマス！）。

主を信じる者は、どんなことがあっても、「主われを愛す、主は強ければ」と歌って（讃 461 番）、強く生きるのです。

2017年12月10日

「イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは、『御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか』と…」
ヨハネ 11:35. 36

「神殿奉献記念祭」（ハヌカ）が終わって、過越祭が近づいた頃（十字架！）、主イエスは死に直面して苦しむ者と共にいて、怒り、同情し、祈られます。

マルタに呼ばれてラザロの墓の所に来たマリアが泣き、ユダヤ人も泣くのを見て、主は「心に憤りを覚え（憤慨し→マルコ 14:5）、興奮」されます。人間を苦しめる死（→「最後の敵」I コリント 15:26）に対して、怒る神の御子です。

「どこに葬ったのか」と言って墓に近づきつつ、主は「涙を流され」（→「泣く人と共に」ローマ 12:15）ます。墓の石を開けようとする、マルタは「主よ…もう…」と言って拒みますが、「信じるなら、神の栄光を見られる」と言って、主は人間の弱さに同情しつつも、それに負けずに救いの業を進められます。

墓の入口で主は先ず、「父よ…感謝します」と祈られます（→I テサロニケ 5:18）。御父は「わたしの願いをいつも聞いてくださいます」と、御子の確信を述べた上で、「ラザロよ、出て来なさい」と大声で呼び、その通りになります。

「神の子は、私たちの肉体をまとった時、人間的な諸情念も身にまとわれた」（カルヴァン）のです。「人となりたる活ける神」（讃 121 番）を賛美しましょう。

2017年12月17日

「一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が減びないで済む方があなたがたに好都合だと…」

ヨハネ 11:50

洗礼者ヨハネは、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」（1:29）と言いましたが、主イエスは過越しの小羊として死ぬために来られた救い主です。

ラザロの復活事件は大きな波紋を引き起こします。ユダヤ人の中には主を信じた者もいましたが、危険視した者たちも多く、「ローマ人が来て…滅ぼしてしまう」ことを恐れ、「どうすればよいか」と焦ります（弱いユダヤ人たち！）。

「その年の大祭司であったカイアファ」は、国民を守るために主を殺せばよい、と強い意見を述べます。しかし、「彼の舌は、もっと高い所（天）から動かされた」（カルヴァン）のであって、「イエスが国民のために…散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ」という預言をしたのです（神の強さ！）。

「ユダヤ人の過越祭（→出エ 12:13）が近づいた」時、「イエスを逮捕する」命令が出ている中で、主はエルサレムを去り、「荒れ野に近い地方のエフライムという町」に危険を避けられます（用心深い主！過越しの小羊となるため…）。

カイアファは「民（ユダヤ人）の代わりに」と言いましたが、主は全人類のために死ぬ覚悟です。「（虫のような）我がため」（讃 138 番）に主は来られました。

2017年12月24日

「マリアが…ナルドの香油を…イエスの足に塗り…家は香油の香りでいっぱいになった。」

ヨハネ 12:3

クリスマスの時、主イエスを迎える私たちは何をすべきか、マリアのしたことを中心に教えられたいと思います。

「過越祭の6日前」、主イエスは身を隠しておられたエフライムから出て、ベタニアのラザロの家を訪ねられます（→マルコ 14:3-9）。盛大な歓迎会が開かれる中、マリアは主イエスの全身に香油を塗って精一杯の感謝を表します。

「後にイエスを裏切るイスカリオテのユダ」は、「なぜ…三百デナリオン（三百万円！）で売って、貧しい人々に施さなかったのか」と彼女を非難しますが、主は、「わたしの葬りの日のために」してくれた、と喜ばれます。使徒ヨハネは「彼は盗人で…（お金を）ごまかしていた」と、あとから知ります（一人は変わる、良くも悪くも、ペトロとユダ！）。

主がおられることを知って大群衆が来ますが、彼らの目当ては「イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るため」でもありました。「彼らはキリストの徳の驚くべき証拠をラザロの中に見ようとした」（カルヴァン）のです（クリスチャンとして存在することが大切！）。

香油の香りは家の中から外まで広がったでしょう。主を迎えて、「いそぎ行きて拝まずや」（讃 111 番）と歌いましょう。

2017年12月31日

「見よ、お前の王がおいでになる、ろばの子に乗って。」 ヨハネ 12:15

主イエスはメシアとしてエルサレムに入城されますが（→マルコ 11:1-11）、世界に平和をもたらす救い主です。

「その翌日」（しゅろの日曜日）、主が来られたのを迎える人々は、「なつめやしの枝」を持って歓迎します（青々として力強い!）。「ホサナ（今お救いください）…イスラエルの王」と叫ぶのも政治的な解放者として期待したのです。

主は、「ろばの子を見つけて」乗られます（→マタイ 21:7）が、それは「柔和な方で…子ろばに乗って」（ゼカリヤ 9:9）とあるように、平和な姿を示すためでした。弟子たちがその意味を知ったのは、「イエスが栄光を受けられた」（→12:23）後でした（ヨハネも!）。

この時、「イエスがラザロを墓から呼び出し…死者の中からよみがえらせた」証人たちや、「イエスがこのようなしるしをなさったと聞いた」人々が来ていました。「彼らはイエスにメシアの栄光を帰する至極当然な理由があった」（カルヴァン）のです（→使徒 2:41「三千人ほどが仲間に」）。ファリサイ派の人々は、「世をあげてあの男について行った」と嘆きます（伝道する希望!）。

今の時代に私たちは、一人一人の命を大切にされる「平和の主」（讃 130 番）を心から歓迎し、賛美したいものです。